

# しあわせ



4 月 号



弥陀たのむ 我身の心のこころに

いつも涙にぬるる袖かな

(蓮如上人)

## 「手を合わす母」

四月八日は花まつり。お釈迦さまのお誕生をお祝いする日です。

日本では、新年度の始まりで入園・入学・入社、さらにはお花見の時期と重なって花まつりが話題に上りにくいのが現実です。

お釈迦さまはお誕生になると、七歩歩かれて右手は天を左手は地を指して「天上天下唯我独尊」と叫ばれたと伝えられています。

当然、生まれたばかりの赤ちゃんが言葉を発することなどありえません。これは、お釈迦さまの出現によって人類が、初めて我が命の尊さに目覚めたことを物語っているのです。

「人の命は尊い」とは誰もが口にし、耳にする事ですが、我が命を「尊い」と頷き、有り難しと喜んでいるものは少ないのが現実です。

## 法座案内

△春季永代経法要

四月 二十一日(金) 昼席・夜席

二十二日(土) 昼席

講師 三浦真証 師(本願寺派布教師)

△聞熏会 | 仏弟子の物語に学ぶ |

四月 十三日(木) 午後二時

講師 内藤昭文 和上(本願寺派司教)

会費 1000円

※基礎から学ぶ、やさしい仏教講座です。

△法味の会

四月 二十八日(金) 午前十時

お話し 住職

※お詫びと訂正

龍仙寺だより掲載の仏教婦人会物故者名に誤記がありました。深くお詫び申し上げます。

(誤) 波多野 京子 様

(正) 和多利 和枝 様

府中町山田丁五十三  
栢原山 龍仙寺  
電話(〇八三)二八二四八三



世のなかには「信じたら救われる」と説く教えは多いですが、親鸞さまの大きな特徴は、信ずる心そのものを、仏さまからの恵みとして仰がれたところにあります。その教えを承け、蓮如上人はこのように歌われています。

弥陀たのむ 我身の心の とうとさに  
いつも涙に ぬるる袖かな

阿弥陀さまのお慈悲に身をゆだねている、その自らの心の尊さに、袖をぬらさぬ日はない。自らの信心に涙するというのはおかしいようですが、上人は、その心を開いてくださったはたらきを、仰いでおられたのですね。

そもそも私たちは、仏さまの仰せどころか、人の意見すらかなか聞けません。ある方が、持病がよくならないのでお医者さんに原因を聞いてみたところ、先生は「人の意見を聞かないからですよ」と仰ったそうです。その方は健康によいからと毎日二万歩も歩いておられたのですが、じつは心臓肥大の持病を抱え

ていました。一般的に歩くのは健康によいとされますが、状況によりけりで、その方の場合は、毎日二万歩はむしろ病状を悪化させるものでした。歩くのは健康によいという情報しか聞かなかったため、悪化させてしまったのです。「運動し過ぎるから」ではなく「人の意見を聞かないから」という先生の言葉に、返す言葉がなかったそうです。

考えてみると、人の意見すら聞けないわたしたちが、仏さまの仰せに身をゆだねている、それは驚くべきことといわねばなりません。蓮如上人は、阿弥陀さまのお慈悲に身をゆだねつつ、その心を開いてくださった仏さまのご恩徳に、袖をぬらされていたのですね。

じつはここ半年、四才の次女ひとちゃんの虫歯を心配していました。前歯に虫歯があるのは前から気づいていたのですが、どうしても治療できないのです。歯医者さんに行くまでは笑顔なのですが、いざ治療室に入ると、

わたしにしがみついて離れません。仕方ないのでお膝にだっこして一緒に治療台に上るのですが、両手でお口をおさえる「言わざる」ポーズで全力抵抗です。歯を見てもらうことさえできず、何度も謝って帰りました。これは一度歯医者さんを変えてみようか、ということになり、ご門徒の歯医者さんの所に行ってみました。けれど、また「言わざる」になってしまいます。やっぱりダメかな：と思いましたが、お姉さん先生が「一時間とついでいまずから」と、あの手この手で、娘の心を開くところから手を尽くしてくださいました。結局、今日はハミガキだけしてみよう！ということになりましたが、「言わざる」は解除されません。先生は「じゃあ、今日はお父さんにしてもらおうか。お姉さん外で見てるか」と、あえて治療室を出られました。娘はようやく口をあけ、わたしも初めて歯医者さんのイスに座って娘の歯を磨きました。その

光景を、院内の先生方全員が、モニター越しに見守ってくださっていたそうです。ハミガキが終ると、お姉さん先生が入ってこられないチョコレートをくださいました。院長先生もこられて、「信頼してもらえるかどうかが大変なんです。大丈夫です。必ずできるようになります」と仰ってくださいました。帰り際、お姉さん先生に初めてお口をあけて見せ、ハイタッチまでして帰る娘の姿に、心が開きかけていることを感じました。

二回目だった昨日、娘は一人で治療台に上り、お口を開けてハミガキしてもらい、「次は風をあててみようか」「お水あててみようか」と、次々治療の練習をこなしていきました。治療台に小さな体をゆだね、先生の言葉に「うん」「うん」とうなづく娘の姿に、ゆだねさせてくださるはたらきがある、ということの尊さを教えられました。 南无阿弥陀